哲學研究　第八十四號

デカート哲學に關する二三の考察

朝永三十郎

デカートは、彼は從來既に熟知せられて居る事の外何物をも證明し得ぬではないかといふ反對者の非難に對して、私の關心する事は新知識の獲得といふよりも寧ろ其の「方法」にある、恰も私の「疑ひ」の目的が古來の懷疑論者の論證を蒸しかへすといふことに存せずして只々眞理の方法的基礎づけにあると同じやうに、と答へて居る。此語に依て彼が其主要目的として考へたものが新認識其者に存せずして認識一般の確實なる基礎づけにあつたことを察することが出來る。此主要目的に於て彼れの「方法」とカントの批判との間に或一致が認めらるゝのであるが、併し其基礎づけといふ設問が如何なる程度までカントの意味、卽ち批判的であつたか。尙ほ、此設問に對する答、卽ち實際成立つて居る其方法論の內容に就て見るに、批判的思想は彼處此處に現はれては居るが、其れには論理的批判的、心理的、形而上學的等の諸契機が複雜に混淆綜錯して居て、カントの意味に於ける認識の基礎づけといふ點より言

へば彼れは尙ほ全然暗中模索の狀態にあつたことを示して居る、といふことには多くのデカート研究者が一致し居るのであるが、批判的思想が如何なる形に於て如何なる程度に於て其處に現はれて居るかに就ては尙ほ考査さるべき點が殘されて居る。今デカートの思想の二三の點に就て前擧諸契機の綜錯したもつれを解きほぐして、他の二契機を隱蔽することなくして而かも其中よりして批判的契機を摘出して見たいと思ふ。

先づデカートは其所謂「方法」の下に何を意味したか。デカートは一切の功利的考慮、實用的關心より全然獨立なる純粹なる學的探究に最高價値を置き、知識の追求を一切の功利的副目的より解放せんとすることを其思想の根本特徵の一として居つて(それが彼及び其の繼承者の思想をベイコン及び其英國繼承者の其れより區別する一重要特色である)、而して彼の方法は斯の如き純究理的科學研究に確實な基礎を與へることを目的としたものである。併し其方法は、吾々が單に偶然的落想に依て個々の特殊認識を無秩序に發見するに止まり、若くば功利的考慮や實用的關心やに累せられて必然的眞理を逸することが無いやうにする爲めには、卽ち吾々は決

して必然的眞理を漏らして居らぬといふ保證を得んがためには、認識其者の本性に基いて必然的連絡をたどつて進むものでなければならぬ。斯くてデカートの「方法」は認識其者の本性に基いた、秩序ある、(順序正しき)認識の道である。但し其道は認識其者の本性に基くとはいへ、デカートに依れば眞理に到達せんが爲めに吾々が蹈まねばならぬ道であつて、眞理自體の順序を示すものでは無い。デカートは「省察」に於て、私は物 (デカートの物 res は極めて廣汎な意味を有つて居る、形而上、形而下に互つた一切の存在、卽ち感覺的事物を初め res cogitans, res extensa 等の形而上的實體は無論、彼が res arithmeticae, res geometricae 等の語を以て示した表象又は命題の論理的內容をも含む、後に述ぶべきやうに形而上學的者と論理的者との混淆は彼れの思想の重要特徵の一であるが、此特徵がよく res の一語に象徵されて居ると思ふ) を「彼等が認識に於て續き起るやうに」敍說せんと欲すると述べて居るが、茲に彼れが意味する認識の順序は絕對的認識の順序、卽ち物其者が一が他に依て基礎づけられて居る通りを認識に於て複製するといふ意味ではない。無論其順序又は道は任意に考案されたものでなく、論理的理由に據り、眞理に依て基礎づけられたものでなければならぬが、併し眞理其者ではない。たとへばデカートが「省察」の出發點とした「我は

思惟者として存在す」は一の眞理であるが、併し眞理の當體的順序より言へば其れは絶對的眞としての神に基礎を有するが故に眞理である（此事は更に後に說く筈である）。眞理其者の當體的順序より言へば神よりして特殊的眞理（此處では sum cogitans）に進むべきであるが、併し吾々の認識の道は特殊的眞理よりして神に進み、然る後に此特殊的眞理は神に依て權利づけられるのである。此點に於て彼れの方法は分析的方法と同一である。分析的方法は先づ一特殊事實を拉へて之を問題とする、而して此問題を解き得んが爲めの制約たるべき法則を發見する、然る後に其事實は更に其法則性に依て權利づけられる。分析は眞の理性の順序を示して居らぬ、眞理其者の順序としては分析は總合を既に豫想して居る。要するにデカートの方法は一方に於ては一切の功利的傾向に反對して純粹なる學的研究に基礎を與へんが爲に純粹に認識其者の必然的連絡を追蹤することを本領としてゐるが、併し其學的探究に對しては畢竟一の手段又は道具にすぎぬ（Regulae VIII, 8. Weike I, übers. v. Buchenau, S. 40）此事は方法に關するデカートの殆んど凡ての著作が明かに示して居る。たとへば「方法叙說」の標題（理性を正しく導き諸科學の眞理を探求せんが爲めの方法の叙說、及び此方法に論文たる光學、氣象學、幾何學」（デカート dioptrique, met-

eores 等の內容は今日の光學、氣象學と精密に合致せぬが他に適譯が無いから斯く譯して置く）なる文字に就て見ても、又此書の內容其者に就て見ても、「方法」は眞理其者又は其を基礎づけるもので無くして、唯其の探究の手段に過ぎぬ、此句中に所謂眞理は光學、氣象學、幾何學等の特殊科學を意味し、所謂「理性」(conduire sa raison に於ける raison) は論理的合法則性其者でなくして個人的理性であり、「方法」は此理性を訓練して誤謬を脫して正道を進ましめんが爲の指針を供給するものであることが明かである。更に「哲學原理」に於てデカートが方法の基礎をば其第一部、而かも最分量少なき第一部に於て論究し、其主要目的をば其大部分を構成する他の三部に於ける自然科學的研究に置き、前者を後者の豫備として居ることに依ても同樣のことを知ることが出來る。彼れが全然體系的關心を離れて純粹に方法の考案のみに專注したと稱せらるゝ Regulae に於ても彼は明かに方法の用は「精神的努力を無益に使用せぬ樣にする」にある (Reg. IV, 2. Werke, I, S. 15) と說き、規則第九及び十をば「吾々の悟性の二作用たる直觀及び演繹」を「吾々は如何なる仕方に依て巧みに用ゐ得るやうになされ得るか」を示すものであると說明して居る。是等及び之に類する多くの語句に依てデカートの「方法」の第一の目的が諸科學の探求に適する樣吾々

の精神的能力を訓練修養するにあつたことは疑ふべき餘地もない。

斯くてデカートの「方法」は諸科學を可能にするものではあるが、其所謂「可能にする」とは決してカントの意味に於ての其れ、卽ち既に存在するところの諸科學の批判的基礎づけ、認識一般の原理に依ての其れの權利づけを意味するのでなく、將に研究され造り出さるべき諸科學の事實的可能化の謂である。デカートの方法は功利的目的を離脱したる「科學の科學」ではない。彼れは眞理一般の論理的概念や眞在 Wahrsein 其者に對して妥當する規範やを探求したのではなくして、唯心理的の眞思惟、Wahrdenken の特徵及び指針を確定せんとしたのであつた。

併し彼れの方法は任意的考案に出づる者ではなくして必然的順序を追蹤する「正しき認識の道」であり得んが爲めには其れ自身眞でなければならぬ。論理的に基礎つけられて居らねばならぬ。此點よりしてデカートは方法の學的基礎其者の問題に入らねばならなかつた。併し、科學の研究は方法的でなければならぬ、併し此方法は又た無方法の考案でなくして方法的に考案されねばならぬ、而して更に此方法の方法も亦方法的に基礎つけられねばならぬとすれば、吾々は無限に溯進せねばなら

ぬではないか、といふ疑問が第一に當然起らねばならぬのであるが、デカートは此無限溯進を脱せんが爲めに、派生一般が可能ならんが爲めには不可派生的者が既に豫想されて居る、といふアリストテレースの古き論法に賴つた。彼は卽ち、方法は如何なる科學的知識も直觀と演繹とに基かぬ者は無いといふことを示すのであるが、併し其れは此兩者が如何にして行はるべきかまでは敎ふることは出來ぬ、何となれば兩者は最單純且最初のものであつて、若し吾々の精神が豫め之を適用することを知らぬならば如何なる方法の規則――其れは如何に單純なものであつても――と雖も知り得ぬであらうから (Reg. IV, 3. Werke I. S. 16) と考へた。

偖て、デカートによれば方法が一切の專斷や任意より獨立であらんが爲めには第一に秩序的でなければならぬ、思惟が一定の必然的順序を追ふて進まねばならぬことは前述の如くであるが、其順序はデカートに依れば「相對」より「絕對」に溯り而して一切を其が依存する最後の根據より說明せねばならぬ。彼れの所謂「絕對」とは他の物が依存するもの、其れよりして他の物が說明さるべきものであり、其依存する他物、說明さるべき他物は「相對」である。例へば單純なる要素は複合物に對して絕對である。因は果に對して絕對である。(Reg. VI, 2, 3, 4. Werke I, 25f.) 然らば斯る

順序を履んで進んで吾々が最後に到達するものは何であるか。曰く悟性（intellectus）其者である。悟性は一切の認識が依存するもの、如何なる對象の認識と雖も其れの本性に依存するところのものである。斯くて認識の順序は悟性其者、或は「純粹悟性」（intellectus purus）の研究、「人間認識は如何なるものなるか、其れの圏域は如何」の研究を要求する。吾々は此研究に依て、悟性の圏域を逸脱して徒勢に服し徒らに迷路に蹈入る危險を脱することが出來る。（Reg. VIII, 5, 10, 14. Werke I. S. 38ff.）

茲にデカートは明かに理性批判の必要を認めた。其設問は明かに批判的である。併し其所謂批判的は、慥かに彼れの影響の下に成立つたと思はるゝロックの思想をも含み得るところの批判的であつて、嚴密にカントの意味に於てしかいふは尙ほ早計である。何となれば、此處では「純粹」悟性の認識が要求せられ、而して此「純粹」は一切の感性經驗よりの獨立を意味して居る點に於てロックに比してカントに近づいて居るが、併し其悟性其者は尙ほ心理的概念、卽ち一切の認識が起原するところの心理的能力であつて、嚴密なる意味に批判的の認識の基礎と稱せられ得べき規範意識ではない。此點に於て彼れの批判論は尙ほロックと同樣心理的であつて先驗的と言ふことは出來ぬ。而して其目的より言ふも純粹悟性の批判は吾々をして誤謬を避け

しめ健全なる常識(bon sens)を養はしめんか爲の手段に過ぎなかつた。

知らるゝやうにデカートは「省察」第一に於て凡て「疑ひ得るものに就て」論述し、充分の理由を以て疑ひ得るところの一切を疑ひ、第二に入つて如何なる疑ふべき理由をも考ふる能はざる第一の必然的眞理として cogito に卽して sum を、卽ち私の靈魂の形而上的存在を肯定し、更に其れの本質を思惟(意識 cogitatio)であると規定した。これはデカートに依れば吾々が認知し得る最明晰なる事實である。併し通俗の見解は容易にこれを承認せぬであらう。何となれば、素朴的見解に依れば、その心像(imago, Bild)が私の意識內に形造られ而して其れ自らは感覺に依て檢證され得るところの物體的事物が、私の裡の何處かに在る、想像の對象たる能はざる或物に比して遙かに判明に認知される樣に思はれるからである。此俗見を排せんが爲めにデカートは、一見それ程明白に感官に與へられて居るやうに思はるゝ物體的事物は其實決して感官に依て知覺されて居るのではない、悟性の構成作用を俟つて初めて成立つものであることを示さんとした。成程、個々の性質は直接感官に與へられる。併し是等の性質は直ちに吾々が物と稱するものではない。物に附屬する感性的內

容は絶えず變化する、而して吾々が物といふは是等の變化を通じて同一に恒存すると考へらるゝところのものであるが、其れは吾々が決して知覺することも心像として想像することも出來るものでなく、「唯精神によつてのみ認知」(sola mente percipere) され得るものである (Werke II, S. 14)。斯くて直接感官に與へらるゝところの物といふ素朴的なる表象は、統一を定立するところの理性に依て構成されたる實體概念となり、知覺內容は理性の統捉作用 (comprehensio) に依て統一されて初めて對象となるものであるから、感官の所示が他の一切に優れて明晰であるといふは皮相の見であつて、論理的、方法的には思惟が先行するといふこと、不可疑的に確實なるものは物及び知覺內容でなくして思惟するところの理性である、といふことが證明せられた (Werke II, S. 14—16)。而して斯の如く或形體的事物が感性知覺に於て絶えず變化して現はるゝに拘らず自同的なるものとして把捉されんが爲めには純粹思惟が豫想せられるといふことが明かになつた、と同時に、形而上的存在者としての我の提示は批判的意義を得るに至つた。卽ち、感覺內容が對象化せんが爲めには悟性の統捉作用 comprehensio を要する、私が直接に知覺すると思惟するものも其實「私は私の精神內にある判斷能力のみに依て統捉して居るのである」 (id, quod putabam me videre

oculis sola judicandi facultate quae in mente mea est comprehendo.—Güttler S. 84, Werke II, S. 14)。

尤も此場合に於ても亦「能力」(facultas)、「私の精神」(mens mea) 等の語に依ても察せられ得べきか如く、デカートの思想は尙ほ心理的要素を脱し得て居ないのであるが、併し「判斷」なる語は明かに論理問題を暗示して居るといふことが出來る。

「省察」第三に於てデカートは、「私は思惟者として存在する」なる命題に依て不可疑的眞理一般の標準を定めんとした。此命題は第一の不可疑的眞理の意味を有すると共に、此一特殊的眞理の分析に依て眞理一般の概念が決定せらるゝ。吾々は眞理の事實性よりして其れの基礎づけ、權利づけへと進むのである。「我れが思惟する物なることは私は確實とする」(Sum certus me esse rem cogitantem) なる命題は此事實性を確定したものであり、次に續ける「或る何物かを斯く確實とするに要するところのものは何か」(quid requiratur ut de aliqua re sim certus) の設問は quid juris であつて、而して「要する」requirere なる語に依て論理的價値に對する關係が明確に示されて居る。その訴へた方法は分析的である。彼れは何が「此第一認識の中にある」(in hac prima cognitione est) かを問ひ、其れは「私が肯定するところのものゝ或る明晰にして

判明なる認知」(clara quaedum et distincta percipio ejus quod affirmo) に外ならずとし、而して若し私が或物を斯の如く明晰且つ判明に認知して居るにも拘らず其物が虚偽であるといふ場合があるとすれば、或る物の眞理 (rei veritas) を確信せんが爲めには上のことだけでは不充分でなければならぬ。其故に此第一認識が不可疑の眞理たらんが爲めには「一般的規則」regula generalis として「私が充分に明晰且つ判明に認知するところのものは凡て眞である」omne esse verum quod valde clare et distincte percipio なる命題が設定せられねばならぬとした。(Güttler S. 92, 93. Werke II, S. 17, 18.)

此處に perceptio (私が「認知」と譯した)は決して單獨なる感覺內容又は表象內容を意味するのではない、何となれば單獨の心的表象其者には唯事實性が歸せらるゝのみで眞も僞も歸せらるべきでないからである。此處に所謂 percipio は comprehensio を意味する。デカートは現に先きに形體的客觀的事物の認識が純粹悟性の comprehensio に依つて成立つことを論ぜし場所に於て、「其れの認知 perceptio は視覺作用でも、觸覺作用でも、想像でもなく、尙ほ又た初めはしか見えたとしても決してさうでなかつたのである。然らずして唯々精神のみ洞觀である」(perceptio non visio, non tactio, non imaginatio est, nec unquam fuit, quamvis prius ita videratur, sed solius mentis inspectio,.....—Güttler, S. 84)

と言つて居る。而して此場處の佛譯（デカート自身の校閲と承認とを經た）に於ては此 perceptio は vision, attouchement, imagination ではなくして action par laquelle on l'apergoit である、とされて居る。斯くて perceptio は感覺又は想像の內容の雜多をば compre-heusio に依て綜合する作用であつて、而して此關係概念の意味に於てのみ其れに就て眞理が賓屬され得るのである。尤も此場合に於ても亦、此雜多の結合又は綜合は「作用」(action)。心理的作用であつて、純粹な論理的法則ではない。卽ち此處でも彼れの思想は尙ほ心理主義を脫し得て居ないのであるが、併し perceptio は獨立した表象內容ではなくして結合又は綜合であることは明かである。

更に前の引用句中に於て「物の眞理」rei veritas なる語が用ゐられて居るが、此「物」は素朴的の用語法に於ける實體的の物でもなく、若くば單獨なる心的內容でもない（何となれば兩者共に眞理性が賓屬せらるべきものではないから）第二「省察」に於ける實體概念の批評の場合に確定して居る通り、デカートが res arithmeticae, res intellectuales 等の語を用ゐて居る場合より推して、判斷對象一般を意味するとせねばならぬ。從て perceptio は雜多を統一に結合するところの、而して若し明晰及び判明といふ二特徵を有する場合には當體的眞理 (rei veritas) を把捉するところの、判斷作用である。

而して感性認識は結付けらるゝものであつて結付けるものでないから、此結合作用は感性作用に依て行はるゝものでない、「純粹悟性」(「省察」に於てはデカートが「單なる精神」sola mens と呼び、「規則」に於ける、「明晰判明なる認知」と同義なる直觀 intuitus の定義に於ては「純粹精神」pura mens と名けて居るものであるが、是等は肉體と結付いた精神作用 mens unita cum corpore に對する語として彼れの二元論的の形而上學及び人性學を背景に有するが故に認識論に於ては「純粹悟性」ほど適切でない) に基いて居る。斯くて所謂「一般的規則」の意味は明かとなつたが、併し其れは眞理概念の論理的定義と見るべきものでは無い。此事は「哲學原理」に於ける明晰性及び判明性の說明に於ても示されて居ると思ふ。此說明卽ち「注意せる精神に現前し且つ明瞭なること、恰かも凝視する眼に現前し之を十分力强く且つ明瞭に感觸するところのものをば吾々が明晰に見えると言ふが如くなる認知をば、私は明晰と名ける、云々」の句はライプニッツを初めとして多くの批評家よりして從來屢明晰判明の眞の定義に非ずして寧ろ比喩であるといふ非難を受けて居るが、併し此處でのデカートの目的は、而して perceptio clara et distincta なる語の意味は、心的現象としての眞思、惟、の特性を說明するにあつて、而して之が爲めには彼れは一定の具體的場合に訴へるより外

は無かつたのである。吾々は一定の色又は音をば抽象的定義に依て說明し得ないと同樣に perceptio clara et distincta も事實的心的現象であるが故に嚴密な意味に於て定義することは不可能であつて、唯具體的實例に依て說明し得るのみである、而してデカートは其の爲めに視覺作用を假り來つた。デカートは此處で眞在の論理的定義を下さんとしたのではなくして心理的眞思惟の特徵を示さんとするにあつたとすれば、ライプニッツの批評は的を外れたものであると言はねばならぬ。何となれば、心理的に言へば眞理は實際直接明證の確信を伴ふところの思想の外には無い。ライプニッツが要求したものは個人精神の思惟に於ける眞理の現象の概念でなくして明晰なるもの判明なる者の論理的標準、卽ち眞理自體の概念であるが perceptio clara et distincta は眞理自體ではなくして唯眞理を言表はすもの、眞理に關係するものである。而してデカートは現に論理的樣相に於ては眞理は「必然的結合」conjunctio necessaria であると說いて居る。之に依て perceptio clara et distincta なる概念の純心理學的意味は充分判明となつて來る。

併し此「一般的規則」の確立と共に茲に新たなる問題が起つて來た。デカートは

「省察」第一に於て、以前に確實明白なりと信じたりしことを、其れにも拘らず悉く疑はしいとして斥けたが、若し其れが眞に明晰判明に認知されたるものなりとすれば、今此「一般的規則」が確定した以上之を眞として認容せねばならぬことゝなつた。其故に彼れは更に改めて前に疑つたことを此標準に照して校査せねばならなかつた。先づ吾々が感覺に依て認める形體的事物の存在は最初明晰判明に認知せらるると考へられるものであつたが、然らば其れを認容して差支ないであらうか。此問には彼れは前になされた idea と res、思惟されたるものゝ心的存在と心外實在との區別に基いて明かに、物の觀念が私の精神に存ずるといふ事實は不可疑的に明晰である、併し此 idea と res との間の關係を肯定するところの判斷は明晰不可疑的ではない、と答へることが出來るとした。意識に存ずる物の表象は明晰判明に認知され得るが併し意識を離れての其物其者の存在は明晰判明ではない、從て外物の認識は眞なりとすることは出來ぬ。

次に明晰判明に認知さるゝやうに思はるゝものは算術及び幾何學の對象 (res arithmeticae et geometricae) である。此種の對象に關する判斷は極めて明晰判明に認知せられ、直接の明證を伴ふ、吾々は絶對的に之を疑ふことは出來ぬ。のみならず此場

合には形體的外物の場合に有效であつた疑ひの理由は效力を失ふ。何となれば數學的對象には唯本質が歸せられるのみで存在が歸せらるゝ者でないから、外界に於けるその存在は毫も問題とはならぬ。斯くて數學的判斷は眞として承認せられねばならぬやうであるが、其れにも拘らず吾々は輕々しく之を認容してはならぬとした理由は唯、「極めて薄弱な、且つ言はば形而上學的の)空想上の)疑ひの理由」と彼れが呼んだ、全能なる神が吾々が絕對的に明晰判明なりと思惟することに於ても欺かれるやう吾々を操づゝて居るかも知れぬといふ考慮であつた。併し斯く考ふることに依てデカートは明かに明晰と判明とは其自身に於ては眞理の標準とするに足らぬ、其れが眞理の標準たらんがためには私の思惟の眞理が眞理一般の原理と合致するといふこと、換言すれば此眞理の理念としての神に依て保證されて居るといふことが豫想されねばならぬ、唯此豫想の下に於てのみ明晰と判明とは眞理の標準であり得る、といふことを讓步したと言はねばならぬ。吾々に取てこれ程確實なるが如く思惟さるゝ數學的命題と雖も、絕對的眞理としての神が吾々を欺瞞せざる時に於てのみ妥當する。斯く考ふればデカート自身が「神の全能といふ此先入の見」と稱するものも正當な、論理的な「疑ひの理由」であつて充分に考査の必要あるものと

言はねばならぬ。

是に於て「神は在るか」、「若し在るとすれば彼は欺瞞者であり得るか」といふ疑問は方法的に正當な疑問であるが、併し其れは何等宗教上の理由に出づるのでなく、唯々眞理の基礎づけといふ認識論的意圖よりしての設問である。

デカートの神の存在の證明は知らるゝ如く悟性に於ける表象の主觀的存在(esse objetive in intellectu) よりして之に對應する客觀存在(esse formaliter in re)を證明するといふ點に於て中世の本體論的證明と同樣である。併しアンゼルムスの場合に於ては神の表象の必然性が證明せられて居ない爲めに此表象よりしての神の存在の證明も亦必然性の保證を有せぬに反して、デカートは先づ神の表象の必然的なることを證明して出發した。神卽ち「最完全者」の表象が吾々の精神に必然的なることが證明されなければ之より出發したる神の存在の證明は全然個人的となり普遍妥當性を有する事は出來ぬ。デカートは斯く考へて、吾々の自己の不完全の意識は完全者の表象を自己の內に有することに依つてのみ可能である、吾々が何事かを疑ひ眞を意欲するは自己の不完全を意識することであり、而して此不完全の意識は唯完全者の表象を自己の內に有し之に自己を比較する事に依てのみ可能であると說いて、

本體論的證明の缺點を補はんとした。斯くてアンゼルムスの場合には神の表象は單に私の精神内に於ける主觀的表象として現はれて居るが、デカートの場合には其れは第一に超主觀的な、自然智 lumen naturale に依て必然的に考へられねばならぬ、絶對的に否定さるべからざる理念として現はれて居る。純論理的に考ふればデカートの證明は、疑ひの事實、換言すれば私の認識の相對的にして不完全なることの意識は、其れが意識されんが爲めには絶對的價値標準 (perfectio) としての神を豫想するといふことを意味する。而して彼れの神の存在の證明の本來の目的が單に認識方法の基礎づけにあるが如く、其證明せられた神も亦純論理的に言へば方法を秩序づけるもの、而して方法は秩序といふことより成立つものであるから、畢竟秩序を秩序づけるもの、秩序を定立するところの秩序 ordo ordinans として考へらるべきものである。併しデカートに於ては論理的は常に形而上學的と結付いた居る。彼れの我の概念が既に、統一を可能ならしめるところの機能なると共に形而上的存在者 (res metaphysica) であつたと同樣に、一切の價値法則性を可能ならしむる絶對規範なる論理的概念は形而上的の造物主となり、絶對的價値標準 (perfectio) は絶對價値の所有者、即ち最完全者 (ens perfectissimum) となり、ordo ordinans は creator rerum となつた。而して

此論理的と形而上學的との結合を可能ならしめたものは實に神なる論理的概念が心理的表象と考へられたことであつた。卽ち此心理的表象は一の存在として等しく存在するところの原因を要求する、卽ち此主觀的實在(realitas objectiva)よりして因果律の助を假りて、而して唯々因果律の力に依て、客觀的實在(realitas formalis)が推論される。從て此因果律が效力を失ふとすれば神の形而上學的存在の證明も亦效力を失はねばならぬのであるが、併し神の概念の必然性の證明は之に依て毫末の影響をも蒙むらない。

斯くてデカートは「神は在るか」の疑問を解決した。次に彼れは「神は欺瞞者であり得るか」の問題に移つたが、此處でも亦彼れの思想には種々の要素の混淆を示して居る。若し純論理的に考ふるならば、此問題の解答は、凡ての特殊眞理(例へば、「私は思惟者として存ず」といふが如き)の根據としての眞理の理念は決して虛僞の命題を基礎づけることは出來ぬ、といふにあるであらう。然るに先きに ordo ordinans としての神が造物主なる形而上的人格と化したやうに、此處でも眞判斷の妥當性の根據(ratio)として此眞理法則性は吾々の眞命題の思惟の原因(causa)としての全能的存在者と化し、一切の規範規定の根據としての眞理(Wahrheit, veritas)は眞思惟

の原因としての眞實（Wahrhaftigkeit, veracitas）と化した。

神の概念（卽ち prefectio）の必然性のデカートの論理的證明は確實であつて、先驗的辨證論に於けるカントの批評に依て毫も效力を減ぜざるのみにらず、批判哲學の精神とよく合致するものである。"Regulae"に於て批判的思想を認める點に於ては寧ろ過ぎたるの觀があるナートルプが、デカートが眞理を神の意志に依屬せしめたことをば、最遠く批判的原理を逸脫したこと（denkbar weiteste Abirrung vom kritischen Prinrip）と評したのは、デカートの證明に於ける此面を看過したものである。唯神をば形而上學的存在として證明せんが爲めには本體論的證明の助けを借らねばならぬ、從て本體論的證明に對するカントの批評に於て根抵の動かされるは當然である。